

# 長崎市平和式典「平和への誓い」

9日の長崎市主催の平和記念式典で被爆者代表の工藤武子さん(85)が行った「平和への誓い」(全文)は次の通りです。

## 被爆者代表 工藤武子さん(85)

78年前の8月9日、7歳の私は爆心地から約3キロの片端町の自宅で母親や姉、弟2人の5人で食事を囲んでいました。突然、強烈な閃光(せんこう)が走り、皆一齊に庭先の防空壕(ぼううごう)に駆け込んだ次の瞬間、地響きのような音がして私は母にしがみつきました。しばらくして櫻を出てみると、縁側のガラス戸は跡形もなく壊れ、量はね上がり、食卓はひっくり返っていました。

その後勤務先の造船所から帰宅した父は、爆心地に近い城山町の叔父の家に行き、2人の遺体を探し出し、焼け跡で荼毘(たび)に付しました。書斎の瓦礫(がれき)の下にあつた叔父の遺体も曾所

で見つかった叔母の遺体も無残に焼けていたそうです。

原爆投下直後、私たち家族は無事でした。が、被爆から10年余りたち、次第に体調を崩していく父は肝臓がんと診断され、亡くなりました。臨終の時、父の顔に酸素マスクを当てていた私は、「神様、私の家族をお守りください」という最期の言葉を聞き、涙が止まりませんでした。その後、母と姉、弟、そして被爆時、母の胎内にいた妹までが、相次いでがんで亡くなりました。私自身も3年前、肺がんの手術を受けました。たった一発の原爆で、長崎ではおよそ7万4千人、広島では14万人がなくなり、生き残った人々の

# 灰色の世界ではなく命輝く青い地球を

多くも、今なお、さまである後遺症に苦しんでいます。

世界には、長崎や広島で使われた原爆の威

力を大きく上回る核弾頭が約1万2500発存在し、ロシアのウクライナ侵略による緊迫した国際情勢の中、この美しい地球は、核兵器によって破壊され汚染される危機にさらされています。核戦争を起さないために、唯一の戦争被爆国である日本は、今こそ広く世界に広く核兵器の非人道性を伝え、武力による平和創造の道筋を指し示し、地球と人類の未来を守るには、核兵器廃絶しかないと強く訴えるべきです。

私は、今から15年前の2008年の秋から4ヶ月間、「第63回ピースボート地球一周の旅」に参加し、船で世界一周しながら自らの被爆体験を証言しました。そのとき同乗されていたカナダ在住のサーロー節子さんの力強い言動に鼓舞され、帰国後は被爆者団体の理事としてさまざまな活動を始めました。

現在は、小学校などの平和学習の場で、被爆2世の方々と製作し

た紙芝居を使い、被爆体験の証言活動に取り組んでいます。これは

長崎に原爆が投下された後、救援列車第一号に乗り込み、救護活動にあたった当時20歳の男性の体験をもとに製作したもので。紙芝

居を見る純真な子たちの姿に触れるたび、私はこの子どもたちが戦争に巻き込まれ、私たちと同じ苦しみに遭うようなど強く感じています。

今、わが国には、被爆者の願いをしっかりと受け止め、核兵器廃絶と平和な世界の実現に向けて活動を続けている高校生があります。さらに私の住む熊本県では高校生が「ヒロシマ・ナガサキピースメッセージプロジェクト」と題して、同世代や下の世代にむけた平和学習の出前授業も行っています。

その若者たちの姿に勇気づけられ、私は未来への希望の光を感じています。放射能に汚染された灰色の世界ではなく、命輝く青い地球を次の世代に残すため、これからも力の限り、尽力していくことを誓います。